

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：34316

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05574・19K20784

研究課題名（和文）現代的身体論：フィリップ・デスコラの思想研究を中心として

研究課題名（英文）Thinking the Body Today: Around the Thought of Philippe Descola

研究代表者

小林 徹（KOBAYASHI, TORU）

龍谷大学・文学部・講師

研究者番号：70821891

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、フィリップ・デスコラの思想について、現象学以降の哲学的流れと、構造人類学以降の人類学史的流れの二つの側面から研究を行った。特に身体論的テーマに注目し、哲学的言説と人類学的言説の交点を探った。成果としては論文数本を公表したほか、デスコラの名著『自然と文化を超えて』の翻訳を完成させた。また渡仏調査にてデスコラ自身へのインタビューを行い、それを論文として発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

様々な分野で学際的枠組みを横断する問いかけが交わされている現在、現代人類学が提起した「存在論的転回」という問題設定に回答することは、現代哲学にとっても喫緊の課題である。本研究では、メルロ＝ポンティの現象学的身体論を参照しつつ展開されるフィリップ・デスコラの思想を取り上げ、改めてその哲学的意義を問い直すことを通じて、哲学的言説と人類学的言説という従来の枠組みを超えて現代社会における身体の在り方を議論するための緒を探った。

研究成果の概要（英文）：In this inquiry, we studied the thought of Philippe Descola from two perspectives: the philosophical current since phenomenology and the anthropological current since structural anthropology. In particular, we focused on the theme of living body to seek an intersection of philosophical statement and anthropological statement. We produced several articles owing to this inquiry and finally published the translation of Descola's Beyond Nature and Culture. Moreover, we conducted interviews in France with Descola himself and published it.

研究分野：哲学

キーワード：現代人類学 現代哲学 メルロ＝ポンティ ドゥルーズ レヴィ＝ストロース デスコラ

1. 研究開始当初の背景

(1) 現代的身体論というテーマに関しては、これまでモーリス・メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』を一つの焦点として、J.ギブソンのアフォーダンス論や H.R.マトゥラーナと F.J.ヴァレラのオートポイエーシス論など幅広い展開を見せていたが、研究当初においては、多様な問題を総括しうる身体理論の構築は完成の途上にとどまっていた。このような閉塞状況に対する突破口としては、ジル・ドゥルーズの反現象学的な思想を挙げることができる。ドゥルーズは哲学における自然概念の刷新を通じて新たな身体概念を提示し、現代的身体論の問題領域を大きく拡大した。フィリップ・デスコラを中心とする「存在論的転回」と呼ばれる動向は、このような流れに大きな影響を受けている。それゆえデスコラの思想の解明は、現代的身体論の構築に寄与すると思われた。

(2) フィリップ・デスコラの思想は、主にクロード・レヴィ＝ストロース以来の構造人類学を受け継ぐポスト構造主義の人類学を代表するものとして理解されていたが、哲学的文脈も含めてそれを包括的に捉える研究はまだ行われていなかった。とりわけメルロ＝ポンティの影響については、デスコラ自身の言及にもかかわらず、ピエール・シャルボニエとの対談 (Philippe Descola, *La composition des mondes : Entretiens avec Pierre Charbonnier*, Flammarion, 2014) を除けば、深く掘り下げる研究はほとんど見られなかった。デスコラの思想が既存の学問領域を横断するものである以上、哲学者であるメルロ＝ポンティとの関係性においてそれを論じることは、デスコラの思想の本質を理解する上でも必須の作業であると思われた。

以上の2点から、現代的身体論の構築に向けて、デスコラの思想の哲学的側面を掘り下げる研究の必要性が浮かび上がった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、(1) デスコラの思想を現代人類学における「存在論的転回」と呼ばれる動向を代表するものとして理解し、レヴィ＝ストロースの構造人類学との対比を際立たせると同時に、(2) 特にメルロ＝ポンティの現象学の影響を確定することを通じて、そこに含意されている身体論を哲学的文脈の中で捉え直すことである。

3. 研究の方法

研究の方法としては、(1) まずデスコラの思想の哲学的含意を掘り下げるために、デスコラが提起した西洋近代の「ナチュラリズム」に対する批判を、メルロ＝ポンティからドゥルーズに至る現代哲学の文脈の中で検証する作業を行う。また、現象学の立場から現代人類学の問いかけに回答しているルノー・バルバラスやエティエンヌ・バンブネの主張を調査し、現象学的身体論の可能性を探る。(2) 次に、デスコラが身を置いている同時代的な文脈を調査する。特に、ともに「存在論的転回」を担うと目されているエドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロが表した『食人の形而上学』におけるデスコラ批判を検証することを通じて、デスコラの思想の独自性を浮かび上がらせる。また、フレデリック・ケックをはじめとする次世代の人類学者への影響関係を探る。

研究にあたっては、従来の文献調査や文献読解だけでなく、哲学と人類学をまたぐ本研究のテーマの学際性を考慮して、国内外の人類学研究者との協力体制を重視し、適宜リサーチ・ミーティングを行いつつ、多面的に研究を進める。

4. 研究成果

本研究の主な成果として、既刊論文「ドゥルーズとナチュラリズム：人類学的視点から」においては、ドゥルーズが、独自の自然概念から西洋近代における「ナチュラリズム」の傍らに「新しいナチュラリズム」を読み取り、レヴィ＝ストロースの構造主義のうちにポスト構造主義的動向を見出すことでデスコラを含む現代人類学の歩みを予見した点を論じた。ヴィヴェイロス・デ・カストロをはじめとする現代の人類学者が、しばしばドゥルーズ(あるいはドゥルーズとガタリ)の仕事の画期的なものとして評価している中で、当のドゥルーズ自身が構造主義とポスト構造主義の結節点を論じている点は極めて重要である。これによって、レヴィ＝ストロースの構造人類学とデスコラのポスト構造主義の人類学との接合点を、両者の師弟関係という経験的事実に依拠することなしに議論する道が開けるからである。ドゥルーズは、構造主義とポスト構造主義の間に連続性を認めつつも、構造の「外部」という問題を通じて、レヴィ＝ストロースの構造主義が問題化しえなかった領域に焦点を当てている。普遍的な構造とその「外部」の緊張関係という観点から、現代人類学の展開を再検討することが今後の研究の課題となる。

本研究では、この点について、既刊論文「野生の言説：メルロ＝ポンティとレヴィ＝ストロース」において、同時期に提示されたメルロ＝ポンティとレヴィ＝ストロースの「野生」概念の再検討を通じて論じた。「野生」概念は、両者にとってつねに自らの言説の「外部」を指し示す極限的概念であった。メルロ＝ポンティは、語られた言葉に基づく哲学的言説を、より根源的な存在の語りに還元し、「野生の精神」を開示しようとする。そしてレヴィ＝ストロースは、言説の

構造そのもののうちに記号作用の過剰性(「浮遊するシニフィアン」)を見出し、近代的思考による概念操作とは異なる非概念的な記号操作(「プリコラージュ」)の可能性を「野生の思考」のうちに探ったのだ。メルロ＝ポンティの存在論とレヴィ＝ストロースの構造主義は、野生的自然の「存在」と野生的知性の「構造」という、一見すると相反するような異なる観点に立ちながら、ともに近代的な言説システムの「外部」を描き出そうとしていたのである。構造人類学の方法論を受け継ぎながら「存在論的転回」を行うデスコラの思想は、近代的「ナチュラリズム」への批判という点において、まさに「野生」概念をめぐるメルロ＝ポンティとレヴィ＝ストロースの思想的対話の延長線上に展開されていると言えるだろう。

最後の点については、渡仏調査の際に行ったインタビュー(「失われた対話：フィリップ・デスコラへのインタビュー」)においてデスコラ本人に直接確認することができた。特にデスコラの身体論を論じる上で、民族誌的に記述される存在論的次元と、人類学的な比較の観点からなされるモデル構築的次元を切り分ける必要性が明確にされた。また本インタビューでは、いわゆるポストモダン思想に対するデスコラの批判的な距離感を明らかにすることができた。これは、ドゥルーズをはじめとするポスト構造主義的潮流を自らの立脚点としているヴィヴェイロス・デ・カストロとは対照的な態度であり、デスコラの身体論の位置づけを明確にする上でも重要であるだけでなく、両者が属するとされている「存在論的転回」の全貌を把握する上でも貴重な証言となるだろう。

論文執筆と並行して、本研究の最重要文献である『自然と文化を越えて』の翻訳作業も完成させた。本書はデスコラの主著とされており、ヴィヴェイロス・デ・カストロ、ブリュノ・ラトゥール、マリリン・ストラザーンといった同世代の思想家たちだけでなく、ケックをはじめとする次世代の思想家たちにも甚大な影響を及ぼし、数多くの論争を引き起こし続けている問題の書である。本書の刊行により、本研究をその一部とする学際的領域の開拓が今後より一層進展することが期待される。

本研究ではフィリップ・デスコラの思想研究を手がかりとして、哲学的言説と人類学的言説の交点を探るといふより大きな問題へと接近するための道が切り開かれた。デスコラの身体論の全体像については、当初想定していた以上の広がりを含んでおり、その全貌を解明しえたとはとても言えないし、同時代的な影響関係についても、『自然と文化を越えて』をめぐる論争を調査するにとどまったが、今後この研究をさらに推進するための礎を築くことはできた。とりわけ本研究で掘り下げられた「野生」概念をめぐるメルロ＝ポンティとレヴィ＝ストロースの「失われた対話」は、デスコラの思想的源泉となっただけではなく、「存在論的転回」という動向全体を学際的な広がりの中で照らし出すための基準的論点となりうるだろう。今後の展望としては、この方向性に従って、「存在論的転回」をめぐる個別的な諸問題をより精緻に論究していくことが目標となる。したがって本研究は、2020年度に開始した若手研究「野生概念の再考と意義：現代フランス思想における存在論的転回」(研究代表者：小林徹)に引き継がれる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小林徹	4. 巻 34
2. 論文標題 野生の言説：メルロ＝ポンティとレヴィ＝ストロース	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 龍谷哲学論集	6. 最初と最後の頁 37-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林徹	4. 巻 494
2. 論文標題 失われた対話：フィリップ・デスコラへのインタビュー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 龍谷大学論集	6. 最初と最後の頁 53-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林徹	4. 巻 27(54)
2. 論文標題 ドゥルーズとナリユラリスム：人類学的視点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アルケー	6. 最初と最後の頁 51-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林徹	4. 巻 第27号
2. 論文標題 ドゥルーズとナチュラリスム：人類学的視点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アルケー	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小林徹
2. 発表標題 ドゥルーズとナチュラリスム：人類学的視点から
3. 学会等名 関西哲学会第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林徹
2. 発表標題 メルロ＝ポンティとナチュラリスム：文化人類学的視点から
3. 学会等名 日本現象学会第40回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林徹
2. 発表標題 Two Ontological Turns: Around the Question of Naturalism
3. 学会等名 顔身体学シンポジウム「トランスカルチャーとは何か？心理学と哲学の協働」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 フィリップ・デスコラ（著）、小林徹（訳）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 640
3. 書名 自然と文化を越えて	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----